

「出て行ったパリサイ人たち」

マルコの福音書 3:6

はじめに

聖書をその原語であるヘブル語で読み解く、さらにそこに記された一つひとつの言葉を、その言葉が聖書で最初に使われた箇所、出来事からその言葉の持つ本来の意味または目的を考察し、それに従って解釈していくならば、そこには神の第一の御心とも言うべき、神の成し遂げたいこと、完成させたいご計画が表されています。それがたとえ一見何の変哲もない、ただの状況説明、情景描写のように思える文章であっても、そこにも神のご計画に関する何等かの情報が隠されています。今日はまさにそのような箇所となっています。

1. 安息日

【新改訳 2017】マルコの福音書

3:6 パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。

この箇所を読んで感動したり、あるいは「恵まれた」と言って書き記したり、暗唱したりするクリスチャンはおそらくいないでしょう。むしろ逆にパリサイ人やヘロデ党に対する怒りや憎しみがこみ上げてきたり、あるいはイエシュアが殺される場面を想像して悲しい気持ちになったりするかもしれません。しかし多くの場合、この箇所は単なる状況説明として、聖書の御言葉ではあっても、それほど目を留める必要のない、重要度の低いものとして扱われることでしょう。しかしこのような箇所でも、ヘブル語の視点で、しかもその言葉の持つ本来の意味で読み解くならば、その考えは一変します。

まずこの箇所は、イエシュアが安息日に会堂に入れ、そこで片手の萎えた人を癒された直後に起こった出来事を記しており、安息日に対するイエシュアとパリサイ人たちの解釈の違いを表した場面です。詳しくは前回、また前々回のメッセージで述べましたが、端的に述べるならば、パリサイ人たちはこの安息日を律法に記された、「一切の労働を禁じる日」として捉え、一方イエシュアはその律法全体がご自分とご自分に任じられた神のご計画を指し示しており、安息日はそのご計画の完成を指し示すものであることを示されました。片手の萎えた人を癒すという奇蹟も、単なる癒しの御業というだけでなく、イスラエルの民が神の選びの民としての地位を取り戻し、永遠のいのちが与えられるという、これから後に起こる出来事すなわち神がなされる御業を、たとえ話のような形で表したものであったということを書きました。ですからこの出来事の直後に記されたこの「パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」という記述、描写もまたイエシュアの指し示された「安息日」すなわち神のご計画の完成についてのものであると考えられます。

それでは一つひとつの言葉に目を留めながらこの箇所にごどのようなメッセージが隠されているのかを見てみましょう。

まずここに記された状況を説明している以下の五つの言葉に注目したいと思います。

**「パリサイ人たち」 「出て行って」 「ヘロデ党の者たち」 「(どうやって) 殺そうかと」
「相談し始めた」**

これら五つの言葉を一旦バラバラにし、聖書の原語であるヘブル語に戻し、それぞれの持つ本来の意味を導き出した上で、再度組み合わせてみたいと思います。

2. パリサイ人たち

ヘブル語では、ハ・ペルーシーム(חַיִּי הַפְּרוּשִׁיִּים)と言い、「明らかにする、はっきりと示す」という意味の動詞パーラシュ(פָּרַשׁ)がその語源であると考えられる名称です。このパーラシュはレビ記 24:12 にその最初の言及があり、神をののしった者に対して、神がその者の死を「はっきりと示す」という出来事で最初に用いられています。ですからこのパーラシュには本来、**神に逆らう者への死の宣告**というような意味があると考えられます。またこのパーラシュの名詞形、パーラーシュ(פָּרָשׁ)は「騎兵、軍馬」という意味で、創世記 50:9 の最初の言及の中でヤコブ（すなわちイスラエル）の長子ヨセフがエジプトからカナンへの上り途中に率いて行った非常に大きな軍隊を指し示した言葉であり、カナンへの地、すなわち**神がアブラハムとその子孫とに与えられた地、異邦の地にいたイスラエルの民が群れを成して入って行く、帰って行く**という、神の民イスラエルの回復、再建の出来事が「型」として表されていると考えられます。このように、パリサイ人、ハ・ペルーシームという言葉には、**神に逆らう者の滅びと神の民イスラエルの帰還、回復、再建**という二つの出来事が表されており、この言葉一つだけをとっても神のご計画の完成を指し示すものであると言えます。

3. 出て行って

「出て行く、出て来る」という意味の動詞ヤーツァー(יָצָא)は、創世記 1:12 にその最初の言及があり、神が天地創造の第三日に、種を持つ植物を地に生じさせたことに本来の意味があります。ですからヤーツァーは本来、地上における増殖、種族の繁栄を指し示した言葉であると考えられ、先ほどの**パリサイ人たちのヘブル語、ハ・ペルーシーム**に表された出来事の後に、**地上に豊かな生命の繁栄、祝福の時代が訪れること**が表されていると考えられます。特に神はアブラハムに対しては天の星々を指し、「あなたの子孫は、このようになる。(創世記 15:5)」と約束されましたので、アブラハムの子孫である**イスラエルの民によって地上に豊かな祝福が与えられる**ことが指し示されていると考えられます。

4. ヘロデ党の者たち

この者たちは、当時イスラエルの地を支配していたローマ帝国からこの地における統治を任されていたヘロデ家を指示する者たちで、ローマに対して協力的な政治家たちでした。厳格に律法を守ろうとするパリサイ人とは対極に位置する存在でしたが、イエシュアを殺すことについては意見が一致したため

共謀することとなります。このヘロデという名はギリシャ語ですが、ヘブル語で表記すると(הורדוס)このようになり、そこにヤーラド(יָרַד)「降りる、下る」という意味の動詞を見つけることができます。このヤーラドの最初の言及は創世記 11:5 で、バベルの民が神に敵対する象徴として建てていた塔をご覧になるために、神が天から「降りて来られた」という出来事にその本来の意味があります。そして結果的に神はこのバベルの塔およびその町の建設をやめさせられます。ですからヤーラドには本来、**神に逆らう者たちの企て、計画をやめさせる、終わらせるために神が天から降りて来られる**という出来事が表されており、究極的にこれはイエシュアの地上再臨を指し示すものであると考えられます。やがてイエシュアがこの地上に再び来られます。その時はかつての馬小屋で生まれた赤ん坊のようにではなく、先ほどの**パリサイ人たちのヘブル語、ハ・ペルーシームの語源であるパーラーシュ(פָּרָשׁ)**、すなわち非常に大きな軍隊、おびただしい天の軍勢を率いて、天から降りて来られます。それは神に敵対するすべての企て、支配を終わらせ、ただイエシュアによって全地が治められ、神のご計画の完成である神の国、御国が建てられるためです。その事実がこのヘロデという名に隠されたヤーラドという言葉の中に表されていると考えられます。

5. 殺そうかと

これには「滅びる、死ぬ」という意味の動詞アーヴァド(אָוָד)が使われています。この言葉の最初の言及は出エジプト記 10:7 で、イスラエルの民がエジプトの奴隷となって苦しめられていた時代、神はモーセという一人の預言者によってこれを解放しようとされました。しかしエジプトのファラオ（王）はこれを拒んだため、神はエジプトに大きな災いをもたらします。これに悲鳴を上げたファラオの家臣たちが「エジプトが滅びる」と言った箇所に、アーヴァド本来の意味があります。

【新改訳 2017】 出エジプト記

10:7 家臣たちはファラオに言った。「この男は、いつまで私たちを陥れるのでしょうか。この者たちを去らせ、彼らの神、【主】に仕えさせてください。エジプトが滅びるのが、まだお分かりにならないのですか。」

このように、「この者たち」すなわちイスラエルの民を「彼らの神、【主】に仕えさせ」ることと「エジプトが滅びる」ことが並べて記されています。ですからアーヴァドには本来、**イスラエルの民が神のみそばで仕えるようになること**と「エジプト」に象徴される、**神に逆らう者が滅ぼされること**の二つの出来事が密接に結びついていることが指し示されていると考えられます。

6. 相談し始めた

「忠告する、計画する」という意味の動詞、ヤーアツ(יָאָץ)がここに使われています。最初の言及は出エジプト記 18:19 で、預言者モーセのしゅうとであった、ミディアン人の祭司イテロがモーセに対して語った助言を指し示した言葉です。

【新改訳 2017】 出エジプト記

18:19 さあ、私の言うことを聞きなさい。あなたに助言しましょう。どうか神があなたとともにいてくださるように。あなたは神の前で民の代わりとなり、様々な事件をあなたが神のところに持って行くようにしなさい。

イテロはモーセに、神がともにおられること、そして「民の代わり」つまり代表として神に近づく選ばれた存在となることをヤーアツ「助言」しました。ですからヤーアツには本来、民の代表、リーダーとして神に近づき、神と言葉を交わす存在が指し示されていると考えられます。この存在とはイエシュアではないと考えられます。なぜならイエシュアは御父である神とひとつである御方ですから、かつては人の代表としてそのすべての罪を背負い十字架にかかられましたが、今やイエシュアは天の御座におられる、人の側ではなく神の側の存在です。もちろんやがてこの地上に再び降りて来られますが、だからと言ってその権威が下がり、人と同等になってしまうわけではありません。イエシュアは永遠に崇められるべき、礼拝の対象となる御方です。ですからこれはやはりイスラエルを指し示していると考えられます。神はアブラハムの子孫である彼らによってすべての民族、国々の民を祝福すると仰せられました（創世記 12:3）。ですからイスラエルこそ神と人との間に立つ、全ての国々の代表として、国々の民の中から神によって選ばれた、神に近づくことができる存在であると言えます。このようにヤーアツは本来、全ての国々の代表としての、まさに神の選びの民としてのイスラエルを指し示す言葉であると考えられます。

7. イスラエル

以上これら五つの言葉の持つ本来の意味をまとめるとこのようになります。

記述	語源	最初の言及	指し示される出来事
パリサイ人たち	パーラシュ(פָּרָשׁוּ)	レビ 24:12	神に逆らう者の死、滅び
	パーラーシュ(פְּרָשׁוּ)	創 50:9	イスラエルの帰還、回復、再建
出て行って	ヤーツァー(יָצָא)	創 1:12	イスラエルの民によって地上に豊かな祝福が与えられる
ヘロデ党の者たち	ヤーラド(יָרָד)	創 11:5	神に逆らう者たちの企て、計画をやめさせ、終わらせるために、神が天から降りて来られる
殺そうかと	アーヴァド(אָבָד)	出 10:7	イスラエルの民が神のみそばで仕えるようになることと、神に逆らう者が滅ぼされること
相談し始めた	ヤーアツ(יָצָא)	出 18:19	神の選びの民としてのイスラエル

このように、「パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」という記述には、イスラエルを中心とした、神のご計画の完成を指し示す情報や出来事が詰め込まれていると言えます。つまりそれはイスラエルの民、ユダヤ人が、真に神に仕え、神の御心を行い、全ての国々を祝福する存在となるということであり、またそれに逆らう、敵対する存在は全て、神によって滅ぼされてしまうことも示されています。このように、前回に引き続きこの箇所もまた安息日に起こった出来事として記され、神のご計画がイスラエルの存在を抜きにしては決して完成しないことを今一度強調するかのよう記された記述であると考えられます。